

元刊『佛説目連救母經』の口語特徴

砂岡（鈴木）和子

（論文提要）

日本京都金光寺藏元刊本《佛説目連救母經》是一部首尾完整的上圖下文式佛經故事話本。到目前為止、可填補自唐宋變文以後到元明間出現的目連救母寶卷為止這一段空白的唯一資料。從繪畫史、戲曲、語言方面來看、其學術價值都很高。

本文主要將針對此經的元代漢語口語特點進行分析、首先在以前著作校訂工作的基礎上、補漏勘誤以便提供共同討論的客觀材料。其二把《救母經》的字體跟宋刻《祖堂集》比較、證明此經有宋元俗字的特點。其三指出在文句上反映的口語語法特點、如“將”、“得”在虛化的同時、發展為多功能詞、互補語義。此謂近代漢語成熟過程中的一種異化現象。

0. はじめに
1. 元刊『佛説目連救母經』の資料価値
2. 『救母經』の体裁および出版状況
3. 字体の特色
4. 口語語法

5. 語彙特色
 6. 小結
 7. 余語
- 附 校録

0. はじめに

文永・弘安の役で蒙古襲来を経験した日本幕府がいまだ臨戦体制を
しているとき、民間商船は活発に中国江南の地に向け出帆した。禪
僧の入元も南宋時を凌ぐ勢いであつたといふ。⁽¹⁾十四世紀初め、広州か
ら日本にもたらされた目連救母經を、檀家の賛助を得て翻刻した僧が
いる。⁽²⁾本稿が取り上げる日本京都金光寺藏の元刻絵入り版本『佛説目
連母經』（以下『救母經』と簡稱する）がこれで、上絵下図の卷子仕立
とし、孟蘭盆供養にあわせて印刷されている。

目連救母といえはインド經由の原典が翻案漢訳されて以来、中国本
土はもちろん東南アジアで広く民衆に浸透した仏教故事として知られ
る。⁽³⁾今日もシンガポールや台湾の華人圏で中元の季節に目連經が印刷
頒布され、大陸では久しく息を潜めていた目連劇の奉納上演が復活し

ている。唐宋の目連救母変文以来、文献が途絶えがちな目連経であるが、日本に伝わる『佛説目連救母經』は元代の系譜の空白を埋める好資料といえる。

浙東道慶元路（現在の寧波）榷縣迎恩元外蕉君廟界新塘の保経居なる店が印刷した本経を、遙か日本の京都に持ち帰り、七月十五日盂蘭盆齋に翻刻していることから、目連救母経は鎌倉・室町期に仏教儀礼の供養書として大いに需要があつたことを物語る。

さて本経はその存在が紹介されて30年弱になる。その間、仏教美術並びに中国戯曲史の専門家による論文があるが、拙稿は『救母経』の言語面、とくに近世資料としての本経の口語特徴を調査し報告したい。『救母経』は平易簡明な口語で記され、字体とともに宋元の言語諸特色を備えている。現存資料の少ない宋元時代にあつては貴重な口語材料となる。

言語資料の扱いには原文校訂をゆるがせにできない。本稿は鮮明な写真資料の入手によって原文を新たに校訂し、先行論文に附された録文の精密を期すことができたと自負する。ここに紙上を借り京都金光寺の新堀俊尚師と写真を提供いただいた新井慧營・一松学舎大学教授に深謝する次第である。

1. 元刊『佛説目連救母經』の資料価値

本経は首尾完全な仏教故事話本で、中国唐代の目連変文と元明代の同宝卷資料の空白を埋める数少ない文献と目される。その存在を始めて紹介したのは宮次男（一九六七）で、世俗的觀照系に属する本経上

絵は「現在図を逸している敦煌変文の原初の図様を推察するに資するところ大」とする。

純中国風に描かれた、例えば長者宅・墳墓・監獄は盂蘭盆地獄説話の完全な中国化を示し、齋場・山中庵・宝塔・燃燈会（第一図）・盂蘭盆会（第二図）は当時の民間仏教信仰の様相を今日に伝えている。

また合計7図の背景に描かれる「倒懸山崖」（第三図）は当時の人々が地獄を現世と「倒懸」（逆転）する世界と理解していたモチーフとし興味深い。

『盂蘭盆経』を敷衍し、『父母重恩経』や孝経倫理を取り入れ平易に編んだ筋書きは唐宋代の変文とほぼ変わらない。変文に原初付録していたと考えられる絵説き用図巻も本経上絵に似ていたのであろうか。変文との相違は地獄遍歴の描写が減り、勧善懲悪、因果応報、功利主義的筆致が強い点である。

吉川良和（一九九一）は本経を宋元代の戯劇史料として論じた。登場人物の多様化、罪人・施経者の昇天、造経所（第二図）、放生、天母来迎等のモチーフは目連救母変文に見られぬ題材で、明代宝卷や南戲へと連なる過程を示す。

言語面を本格的に扱った研究は管見する限りまだない。本経は宣教的色彩が強く文学作品として未成熟とはいえ、言語資料として宋元代口語の素材を少なからず提供する。

2. 『救母経』の体裁および出版状況

『救母経』の体裁および出版状況を宮論文および新井教授惠贈の写

真焼き付けにより概略する。

題記 内題『佛説目連救母經』

奥書 元の辛亥年（南宋淳裕十一年（西曆一二五二）浙東道慶元

路觀県（現浙江省寧波市觀県）の程季六刊行。元大徳八年

（一二三〇四）某が広州にて購入。日本貞和二年（一二三六）

比丘尼法祖重刊。永録元年（一二五八）仙嘗祖宝所持の墨

書銘

装丁 伊勢神宮関係『夢想記』紙背に墨印。縦三三・三_サ 横五

九六・三_サ。上段絵、下段経文の2段組。絵文ともに無彩

色。首尾完全、巻頭見返挿図1葉。原本全13紙折り本、現

在卷子装。上段絵は上下一〇・三_サ。絵中に細字解説。堺

線・湧雲・岩により二十数景に分断。

経文形式 経文十二・七_サ。1行12字詰7行1段落。行間わずかに空

白。散文基調に同型句の重複により押韻効果を出す。唱文

なし。

標点 重刊時全篇に漢文訓点と送り仮名を付すが誤り多し。

原文は巻物で上絵・下文とも段落分けがない。いま各場面を便宜上、
全34段に分け、引用の際は其所属する段数で示すこととする。

1 傳相長者の邸宅

2 財産分与、羅卜出国

3 青提惡業

4 斎場仮設、奴僕益利帰国報告

5 隣人出迎え、羅卜帰途、遙拜

6 羅卜悶絶、母出迎え

7 青提病死、埋葬、羅卜庵中服喪

8 羅卜剃髪、世尊受記

9 目連賓鉢羅庵禪定、尋母

10 剉碓地獄

11 劍樹地獄

12 石磑地獄

13 餓鬼地獄

14 灰河地獄

15 鑊湯地獄

16 火盆地獄

17 獄卒との対決

18 司録王過去帳点検

19 阿鼻地獄

20 袈裟・鉢・錫杖の下賜

21 目連地獄破り

22 母への呼掛け

23 邂逅

24 青提地獄の責め苦を嘆く

25 連れ戻される母

- 26 哀訴する目連
- 27 目連再び仏に助けを求む
- 28 世尊破地獄、獄卒罪人昇天
- 29 黒闇地獄、目連施飯
- 30 恒河畔の餓鬼青提
- 31 点灯・放生供養
- 32 王舎城の狗身母
- 33 孟蘭盆会、母受記
- 34 天母来迎、造経功德

3. 字体の特色

3. 1 『救母経』刊本年と字体

印行奥書きに依れば印刻は大元国辛亥季とあり、西暦では一二五一年となるが疑しい。なぜなら世祖フビライの改元は至正八年（一二七一年）で、資料に依れば浙東道慶元路の設置は至正十四年（一二七七年）以降となるはずである。¹⁰一説では奥付の「大元国浙東慶元路」云々は日本貞和二年（一二四六年）重刊時の加筆改纂であるという。¹¹

しかし『救母経』の刊本年が仮に奥書き通り元辛亥年（一二五一年）であれ、半世紀下って一四世紀初頭であれ、語学資料として大差はないと考える。

絵画的特長は宮次男（一九六七）が指摘するように宋元仏画の流れを映し、また扉絵の構図は敦煌出土唐刻の金剛般若経や、京都知恩院所蔵とみなされる宋元作品の阿弥陀経と酷似する（第四図参照）。後述

する語学面の特色も『救母経』刊行年の佐証となろう。

まず本経の字体の特色を見る。第一に高麗本『祖堂集』¹³の字体と共通点が多いことは注目に値する。禅語録『祖堂集』は南方口語資料として知られ、唐五代の旧字体を伝えて敦煌写本の字体とも共通点を持つ。本経も唐および宋元俗字体の特徴をとどめている。高麗本『祖堂集』の刊行は南宋淳祐五年（一二四五年）、『救母経』奥書き元辛亥年（一二五一年）と同時期である。双方とも中国南方の著作で作品ジャンルも近く、字体の一致はむしろ当然といえる。

以下、太田辰夫著『唐宋俗字譜』祖堂集之部に挙げる写真の字体と対照比較し、本資料の字体特色を列举する。

3. 2 字体の特色

a 宋元俗字体

偏傍別に整理して写真に掲げたように、本経字体の最大の特色は勾画と右肩上がりの筆勢（例：低、少、左、尼、肉、此、世など）および笔画増減（土、肚、美、凡、叫、喚、爾、猶、など）にある。それぞれ写真版の『救母経』原字と比較対照されたい。

俗体字（例：筋、低、鏤、趁、辭、巢、爾、圖）も見えるが敦煌本に較べ種類は格段に少ない。難字も数えるほどで（例：練、闔）、使用頻度も限られる。偏傍移動字も敦煌写本の比ではない。敦煌本の字体が手写であるのに対し、本経は木刻という印字条件の違いが大きい。各人各様の毛筆字体から、宋元刻本の時代に至り、ハード面から字体統一が加速した。本経の字体は唐字体の奔放に欠けるが、宋元木版独

『救母經』字体と『祖堂集』対照比較
 上段『救母經』／下段『祖堂集』。空欄は該当文字凡例無し。()内は楷書体。*は参考字体例。数字は出現段落を示す。

劫¹³

刀(リ)の部

(却)

兒假^{23 4}

兒 假

人(イ)の部

丸⁵

丸

几の部

父⁶

父

ノの部

世⁸

世

一の部

寶害富^{8 13 1}

寶¹³
寶

害

富

冫の部

喫喚吐叫^{10 26 19 24}

喫 喚 吐 叫

口の部

即劬疥^{1 10 10}

即 劬

(前)

少⁶

少

小の部

婢嬌^{1 25}

婢

嬌²⁵

女の部

壓土^{11 7}

壓 土

土の部

圖⁸

圖

口の部

(嬌)

慙⁵

心(忄・忡)の部

(漸)

第⁸

第

弓の部

挺³¹

挺

辵の部

左¹⁰

左

工の部

(左)

属屮^{18 18}

属 屮

尸の部

(屮)

於¹

於

方
の
部

収⁴

収

支(攴)の部

檐⁷ 振²¹ 拜⁵

檐 振 拜

拜⁸

手(扌)の部

椽⁴

(櫟)

木
の
部

所⁴

所

戸
の
部

*
𣎵

蘇⁴

蘇

艸(艹)の部

留²

田
の
部

歸⁴ 步¹³ 此¹⁰

歸⁴

歸 步 此

止
の
部

服⁷

服

月
の
部

者⁵ 是³² 昔¹

(者)

是

昔

日
の
部

趁³ 起⁶

趁 起

走
の
部

(趁)

說¹

說³⁴

說

言
の
部

解¹¹

解

角
の
部

覓⁷

覓

見
の
部

(覓)

衆³³

衆

血
の
部

鑠¹⁹ 鑠²⁰ 銜⁷

鑠 銜

金
の
部

(鐵)

辭⁷

辭 辭

辛
の
部

踏¹⁰

踏

足
の
部

還²⁶ 過⁶ 遂¹ 迎⁵

還 過 遂

迎⁶

迎

走(辵)の部

特の生命力が溢れる。

b 移換字

偏傍など漢字の構成要素の位置が換わる字体のことで、唐宋俗字の一特長である。本経字体にも移換字がみられる。例えば

満 写真 「水の部」 以下同様

喫 「口の部」

喚 同右

慚 「心の部」

焦 「火の部」

處 「虎の部」

c 偏傍異同字

変文や宋元俗字には偏傍が安定せず上下字の偏傍と同化したり、意味に引きずられ偏傍を替える字が多い。本経にもこうした偏傍異同字がある。上段『救母経』 (一) 内通用字体

木偏と手偏、石偏の異同

擔(檐) 抵(低)

拄(柱) 椀(碗)

椶(磔) 於(於)

草冠と竹冠の異同

荅(答)

糸偏と手偏、との異同

撓(繞) 繞(撓)

火偏と灬、金偏の異同

焦(焦) 煑(煮)

鎔(熔)

金偏と口偏、リ、玉偏の異同

銜(銜) 鍊(刺) 環(環)

心偏と忄の異同

慙(慙)

リ頭と刀偏の異同

劒(劍)

月偏と足、齒偏の異同

齧(齧) 躐(躐)

つくりの省略

堅(壓)

d 音通俗字

唐代手写本は自由奔放な当て字、特に音通俗字を用い、後世の読者の理解を妨げる要因となっている。本経には機能詞を中心に音通俗字が見られるが、当て字は多くない。

(小数字は本経の段落数。以下同様)

筋(簞) 4 太(泰) 13

簞「はし」を「筋」とつくるのは宋元俗字に多く見られ、「太(泰)」も常用の音通俗字である。

馳(駝) 1 至(之) 17

快(焔・煬) 25 駟(驅) 18

以(依) 29 主(柱) 9

鏤(鎖) 18、21 用(誦) 23

使役動詞に一律「教」を当て、「叫」は「叫ぶ」意の動詞義専用字に用いられる。同様に動詞の「往く」に「往」を、前置詞は「望」と同音字の機能による使い分けがみられる。

例：教害(＝叫害) 2 教化(＝叫花) 2

音通ではないが同義の字を当てたと思われる例がある。

云(謂) 何 23、25

e 正体回帰

aで述べたように、本経には唐代に見るような大胆な略字はない。一種の正体回帰現象と考えられる。

上段『救母経』 (一) 内は唐代変文の字体

佛 (仏)

菩薩 (弁)

f 文字種の混在

同字形に二種以上の文字種が見受けられる。例えば

僧 僧 作 作 拜 拜

白 白 經 經 歸 歸

遂 遂 解 解 業 業

劍 劍 忍 忍 世 世

前 前 連 連 廻 廻

今 今 胸 胸 處 處

養 養 介 介 鐵 鐵

数種の字型混在は木版の常で、金属活字の精密さを期待することは難しい。むしろ異字種が併存しているからこそ、生々とした版面を造り出している。高麗本『祖堂集』も数種類の字種が見られる。

g 下文正体と上図略体の使い分け

『救母経』の上絵には諸処に小字で解説が刷り込まれている。よくみるとこの挿絵中の字には略字が多い。以下正体(下文中)／俗体・略字(上絵中)を対照する。数字は出現段数。

於 2 / 与 2 餘 2 / 于 2

後 3、7 / 后 3 寶 3 / 宝 3

經 1、2 / 經 6 處 8 / 処 2、9

廻 3 / 回 3 國 2 / 国 2

4. 口語語法

『救母経』は人称代名詞や終助詞など語彙面で一部古代漢語を引きずるが、全体は平易簡明な口語仏典である。宋代の宗汴京(河南省開封)では中元節に「尊勝目連経」が印刷され巷で売られていたと孟元老は『東京夢華録』に記している。¹⁵⁾

中国近世漢語の上下限に関しては異論もあるが、遅くとも晩唐五代

を境とし語法や語彙に大きな変動が始まったとされる。『救母經』の流布した時代は中国語史の区分で言えば近世漢語の成長期に相当する。以下、『救母經』の言語的特色を、口語語法と語彙特色を二方面から記述してゆく。

a 介詞「將」

『救母經』には「將」の介詞（前置詞）用法が多出する。介詞は動詞の前に立ち名詞句と動詞句の關係を明示する役目を担う。文型のタイプは

將N+V+(往/起/得/煞)

となる。下例に見るように介詞「將」の賓語（目的語）は全例が金銭や道具などいわゆる「工具賓語」をとり、現代語の介詞「拿」「用」「(で)」に相当しよう。いずれも「將」の後ろに控える他動詞が処置や行為を表し、介詞の「將」は動詞本来の意義を失い機能詞として作用している。多くが方向補語「往/起」や結果補語「得/煞」を伴う複音節化した動詞を従えるが、「出」「往」などそれ自身方向性を持つ動詞の場合は単音節である。

以下例文を引く。（数字は出現段落数）

- 兒欲將錢出往外國經紀、遣奴益利運將錢本出、有三千貫文 1
兒將一分往全地國興生經紀 2
羅卜將一千貫錢本去得三年 3
若有三寶師僧來我門前：將棒打煞、莫留性命 2
我將此錢歸供養娘 2

我將此錢為娘捨施 2

將汝設齋錢廣買猪羊 3

今日尋得娘見、將何報答弟子之恩？ 22

此時獄主將鐵叉插起打釘落地 23

中国語の介詞はすべて動詞出自であるが、機能詞獲得の代償として動詞本来の行為表現を失う場合が多い。本資料でも「將」の動詞用法は見あたらない。やがて介詞「將」は現代語の「用」「拿」（副詞は「要」）に取って替わられる運命にあるが、本經の「將」は介詞として成熟段階を示し、また補語や副詞用法も備えつつある。

b その他の介詞

「將」以外ではそれぞれ經由地点を示す「從」、地点を示す「在」、方向を示す「望」、対象を示す「共」「與」などを觀察できる。しかし「從」の例に見る如く、後置動詞との間に接続詞が入るなど、介詞機能は未成熟さを残す。また字形で述べたように「望」は介詞専用字として用いられ、動詞「往」と書き分ける。

- 我從汝共郎君行去以後、我在家中日設五百僧齋。 4
罪人從何而入 21
一切南閻浮提衆生、在灰河中奔波迸走。 14
我將鐵叉望心押取將來 17
更着鐵枷刀劍、圍繞放出、與兒相見 21
動詞方向補語 c

V P + 將 + (來 / 出)

「將」は動詞の複合方向補語となり、しかも介詞「將」と同文中に現れる。

我將鐵叉望心押取將來 17

我將鐵叉望心押取將去 25

介詞「將」を用いた文は後述のように使役表現の一種であるが、このような用法は前置詞完成の前段階として結果や方向補語で対格表現を補強する言語事象と考える。

上記「將來」「將去」以外の方向補語には「出／不起」の例がある。

見郎君禮拜不起 5

出来報師 18

目連突入、獄主推出 20

更着鐵枷刀劍、圍繞放出、與兒相見 21

d 動詞樣態補語

(「V取／定／化」などの例がみえる。中でも「V取」は完了マークとして機能詞化が進んでいる。

V取 (+賓語)

取七月半日、造取孟蘭盆齋 33

我兒嬌子嬌子、苦痛難忍、百方作計、救取阿娘 26

我將鐵叉望心押取將來 17

我將鐵叉望心押取將去 25

V却 + 賓語

獄主聞是語已、低頭放却鐵叉、頂禮一千餘拜 21

V定 + 賓語

把定長釘釘身 24

V化 (+賓語)

死合生化樂天宮 17 24

若有三寶師僧來我門前教化 2

e 処置・使役表現「把」「着」「遣」「令」

処置・使役表現と見なせるものには既出「將」のほか「把」「着」「遣」「令」があるが、「將」と異なり4語とも動詞本来の意味が強く、独立の介詞と認め難い。連動句とみなす。

把 + N + V p

唯見兒倒地不起、把兒手語兒曰：6

把定長釘釘身 25

着 + N + V p

更着鐵枷刀劍、圍繞放出、與兒相見 23

遣 + N + V p

遣奴益利運將錢本出、有三千貫文 1

遣奴益利先往歸家 2

羅卜遣奴報处 3 (絵図中)

令 + V

鵝鴨鷄犬、喂養令肥 2

f 受け身表現

受け身表現は古来の「見」と新しい「被」の2タイプを観察できる。ただし「被」式もシテの動作動詞に形式賓語「之」を残す例があり、介詞として成熟の一手手前である。

被+N+V+(之/賓語)

命終之後、被業風吹之、倒懸而下、不從門來 21

目連放却阿娘、被獄主驅入獄中 22

見+N+V P

見父亡歿葬於阿耶山所 1

g 副詞

「將」は前出の介詞、動詞補語以外にまた近未來を表す副詞としても用いられる。

將V

父母今已亡没、孝服將終 7

供養三年、孝服將滿 6

h 助動詞「得」「合」「敢」

「得」は「將」と並び本資料で機能詞として活発な働きを見せる語である。「得」の可能表現には①動詞に前置する「得+V P」(本資料ではVは「見」のみ)と、②動詞に後置する「V得」の2タイプを認めることができる。「得」は「獲得する」意味から「得+V P」の助動詞用法に発展し、さらにその集約表現として後者「V+(不)得(N)」

の可能補語を生ずると考えられる。本経の例は①の動詞前置タイプが多いが、②の動詞に後置して可能を表す例も見える。他に「不得」「方得」「堪得」など副詞と結合した機能語、および疑問詞「何得」のように語尾と化した形がある。「親得」「盡得」といった副詞との結合例も見える。

「V+得」タイプ

今日尋得娘見 21

目連問言：「世尊還救得否？」 27

世尊答言：「我若救汝母不得、長劫入地獄中、代汝娘受罪」 28

「得+V P」タイプ

今日得見阿娘 21

今日果報、得見釋迦牟尼佛弟子面 18

獄中罪人各相謂言：「他家子母向得相見、我等云何無有出期？」 22

得佛改名大目犍連

目連即依佛教、市買楊葉柏枝、造得孟蘭盆齋、得娘離狗身 33

不得與娘久停說話 25

匙筯交橫、香煙雜亂、椀櫟收捨、猶未得了 4

皆得片時停息 21

一切罪人盡得生天 28

請諸菩薩轉大乘經典、方得離黑闇地獄 29

我親得礼拝燃香 28

阿娘形容何得大極劣瘦？ 24

何得今朝恰在地獄門前： 24

山中有何糧食、堪得學道？

盖然性を表す助動詞に「合」が見える。

死合生化樂天宮 17 24

合在地獄、地獄不見 17

確信を表す助動詞「敢」がある。

恐獄主移向苦處、罪人不敢應言 22

i 構造助詞「得」

「得」が動詞に後置され完了を表す例。形式上はhの「V(不)得」と同じであるが、前者は可能を、後者は完了の意味となる。

羅卜將一千貫錢本去得三年、趁得三千貫錢利 3

目連即依佛敕、市買楊葉柏枝、造得孟蘭盆齋、得娘離狗身 24

目連接得飯往獄中 29

目連見大地獄牆高萬丈、黑壁萬重、叫得千聲、無人應矣 19

「得」にせよ既出「將」にせよ、一方で動詞の態を表す補語となり、

他方で助動詞的機能を果たすなど多機能語の活躍が目立つ。

5. 語彙特色

指事代名詞は「此」を用い「这」は無い。句末語氣詞も「矣」「哉」など文語を多く残す。

郎君歸矣 4

言「善哉善哉」： 18

口語的要素は以下の諸点に観察できる。

a 代名詞

二人称は「汝」で「你」を用いない、一人称は「我」が優位で、複数形の「我等」も一例だけある。接頭辞「阿」を伴う呼称が多いのは唐代変文と共通する。

我等云何無有出期 25

阿娘 阿婆 阿耶 阿師 1 29

ただし人称代名詞に接頭辞の着いた「阿你」の形はない。

b 否定詞

否定詞は「不」「無」「莫」「未」の4種類で「没」はない。「莫」は多く禁止副詞として用いられ、変文に見る推量用法は見えない。最後の一例のみ知覚動詞「知」を修飾する状態否定である。

否定詞「莫」

若有三寶師僧、來我門前：將棒打煞、莫留性命 2

莫與奴進 2

莫嗔貧道 18

其家大富……諸頭放債、莫知其数 1

否定詞「不」

長者語常含笑、不逆人情 1

汝若不信、向後園佛堂前、看我設齋所在 4

汝何不應 19

婆也|不是凡人 3

不敢應言 22

不名大目犍連 21

師若不放阿娘： 25

事不相干 26

目連答言獄主：「大慈大悲、信知道不識兒 21

否定詞「無」

走向北門、北門復閉。如是波波馳走、更無休息。

14

無有出期 25

無過造佛 26

c 疑問詞

口語系の「那（||哪）」「誰」「乍」が各一例のみで、文語を基調とする。「何得：？」「云何：？」といった複合語化に口語化の動きを見て取れる。

何

阿娘形容何得大極劣瘦？ 24

何得今朝恰在地獄門前： 24

山中有何糧食、堪得學道？ 8

本師釋迦牟尼佛是師何眷屬？ 21

此獄衆生前身作何罪業、今受此苦？ 25

我等云何無有出期 25

阿師云何到此？ 23

那

羅卜問言益利：「汝那得知？」 5

誰

獄主問師：「誰道師娘在此？」 21

乍

我乍可長劫作狗身、喫人不淨？ 32

d 副詞

狀態副詞「只見」「只得」「正是」「便是」「次復」が多出する。機能詞の二音節化は漢訳仏典の一大特色である。「只手」「急手」「太增生」など敦煌資料に多く現れる口語的接辞（「手」「生」）は見あたらない。

歸到家時正是匙飭交横、香煙雜亂、僧徒並散、收拾猶未得了。 5

目連次復前行、見一剉確地獄、只見：罪人每日之中萬死萬生。 10—20

男女盤旋、聚頭共喫、口唱甘美。今落弟子手中、只得歡喜忍受 10—20

e 待質疑

「阿耶山所」「阿娘山所」「佛所」など「所」が場所名詞語尾として常用される。本資料の特質、又は方言などの反映であろうか。

6. 小結

本経の口語的特色をまとめると以下のようになる。

1. 動詞句表現の多様化

方向補語 將來、將去、V+(出/起)

可能補語 V得(N)

樣態補語 V+(定/却/化/取)

動詞句表現の多樣化は、唐宋末初に始まる近世漢語の流れに軌を同じくする。

動詞句の構造的變化に伴い、動詞句の賓語の位置もバリエーションが見られる。

2. 虚詞の機能強化

介詞の成熟 將、從、在、望、共、興

助動詞 將、得、合、敢

3. 処置使役表現

使役を表す介詞「將」が成熟。同時に動詞補語成分にも「將」を併用し、使役表現を強化

使役表現にあづかる動詞「把、着、遣、令」+Vp

4. 一字多機能化

將 助動詞/介詞/方向補語

得 助動詞/可能補語/動態完了

5. 否定詞の多樣化

不 無 莫 未

6. 宋元俗体字による印刻

第三章「字体の特色」にて既述

7. 余語

造経功德の風習は唐宋元代に留まらず、現代までその軌跡は続く。東南アジア一帯に広がる華人仏教圏では今なお死者を弔う供養として『孟蘭盆経』や『父母重恩経』の印刷が活発である。

95年夏、孟蘭盆の季節に訪れたシンガポールで仏教関係の書店の軒先に『孟蘭盆経』と『父母重恩経』が置かれていた。⁽¹⁸⁾前者は劇画調、後者は英訳付きの現代語で、現代シンガポール版『佛説目連救母経』である。

急速に近代化が進むシンガポールで見た中元節や仏教・道経寺院の孟蘭盆行事は、高層ビルの谷間のあちこちにしつらえた中元節の祭壇を中心に行われ、紙銭を焼く煙は滞在した3週間途絶えることなく街裏に流れていた。夕方からは野外やホーカーズセンターで中元節のオークションと親睦を兼ねたパーティーがにぎやかに始まる。こうした祭祀を「遅れた風習」と省みないシンガポールリアンも少なくないが、中元会の参加者は商家の大黒柱とおぼしき壮年の男性たちとその家族であり、若い供養者が寺廟で熱心に神仏祈願していた。

売地の看板がめだつ再開発中のチャイナタウンや、タンジョンバギーの古い道観・仏閣には善男信女が焼香に絶え間無く訪れる。チャングビーチの新興住宅地のだ真ん中に、大伯公廟再建の土音が高く響いていた。

現世の幸福追究を至上とする華人社会にあって、祖先供養と平安祈

願は共同祭祠の最大イベントであり、こうした人々の切実な願いを仏・道経が積極的に受け止め儀式化している。

シンガポールで見た『目連救母経』の印行頒布はこうした宗教風土が奨励する功德行為であり、本稿で取り挙げた元刻『救母経』の造経と目的を一つにすると考えられる。『救母経』を通し、華人社会の宗教的伝統の息の長さをかいま見ることができよう。

主要参考文献

- (1) 宮次男(一九六七)『目連救母経説話とその絵画』—目連救母経の出現に因んで—『美術研究』二五五号第5冊 吉川弘文館
- (2) 吉川良和(一九九一)『関于在日本発現の元刊『佛説目連救母経』』『戯曲研究』第37集
- (3) 川口久男(一九八四)『大目乾連冥間救母変文』大東文化大学東洋研究所『敦煌資料と日本文献』
- (4) 崑耕茹(一九九三)『目連資料編目概略—民族曲藝叢書』施合鄭基金會
- (5) 志村良治(一九八四)『中国中世語法史研究』三冬社
- (6) 蔣紹愚(一九九四)『近代漢語研究概況』北京大学出版社
- (7) 項楚(一九八九)『敦煌變文選注』巴蜀書社
- (8) 郭在貽(一九九〇)『敦煌變文集校議』岳麓書社
- (9) 入谷義高(一九七五)『目連救母變文』中国古典文学体系卷60『仏教文学集』平凡社
- (10) 太田辰夫著(一九八二)『唐宋俗字譜—祖堂集之部』汲古書院
- (11) 劉復(一九五七)『宋元以来俗字譜』文字改革出版社
- (12) 金岡照光(一九九二)『敦煌の文学と言語』『敦煌の文学文献』大東出版『講座敦煌』
- (13) 岩本祐(一九八六)『目連伝説と孟蘭盆』法蔵館
- (14) 鎌田茂雄(一九八六)『中国の仏教儀礼』大蔵出版
- (15) 大淵忍爾(一九七六)『中国人の宗教儀礼』福武書店
- (16) 禿氏祐祥編(一九三三)『古代版画集』中外出版
- (17) (南宋) 孟元老撰 鄧之誠注(一九六一)『東京夢華録注』商務印書館
- (18) 可児弘明(一九八五)『シンガポール海峡都市の風景』岩波書店
- (19) 藤家礼之助(一九八八)『日中交流二千年』東海大学出版会
- (20) 『元史』(一九七六) 中華書局
- (21) 『浙江通志』(一九三三) 年(光緒二五年重刊本) 商務印書館
- (注)
- (1) 藤家礼之助(一九八八)
- (2) 『救母経』卷末に次の印行奥書きがある。
大元国浙東慶元路謹縣迎恩門外蕉君廟界新塘保經居亦奉三寶受持讀誦經典
弟子程季六名忠正辛亥季十月二十二日(乙酉) 甲辰年大德八年五月□日广州買到經典、普勸世人行年幾領傳之
大日本國貞和二年歲次丙戌七月十五日重刊小比丘法祖
詳しくは附校録奥書き参照

- (3) 鼎耕茹(一九九三)によれば金光寺藏と同内容の『佛説音目連經』(中文)が高麗大学や韓国国立図書館に数8点、また朝鮮語訳が多数存するとあるが未見。

- (4) 『元史』卷62地理によれば後梁開平三年(九〇九年)梁太祖曾茂琳を避諱し、それまでの貿県を觀県と改名。五代北宋時は明州南宋時は慶元府、元代に慶元路、明清代は寧波府の所管とある。「迎恩門外」「焦君廟」「界新塘」「保經居」等に関しては未詳。浙江慶元路一帯は宋元時代仏教文化の中心で書舗乱立し、儒学双書や大型學術書を陸續と出版し文教地区であった。

- (5) 京都金光寺に直接問い合わせたところ、当本経開陳の予定はないが、曾って新井慧營二松学舎大学教授が原巻を撮影し所蔵しておられる由紹介を受けた。その後幸いにも新井教授が写真焼き付けを提供され、拙稿はこれを校訂ならびに写真に使わせていただいた。ただし上絵中の文字で、解説不能部分に関しては吉川(一九九一)の校録に依った。

- (6) 宮(一九六七) p 156

- (7) 俗に「孟蘭盆」の語原はサンスクリット語「Ullambana」であるとされ、「倒懸」と漢訳以来、逆さのイメージが生まれた。

- (8) 川口久男(一九八四)は敦煌目連變文の対照資料として本経を部分的に引用するが、内容の検討には立ち入っていない。

- (9) 本稿は一九九四年八月第4回国際敦煌論文集の拙稿「元刊《佛説目連救母經》校録(附图)」を土台にした。中国の學術出版事情から当論文集の出版が遅れることを懸念し、また当時は未見

であった原本写真を実見する機会に恵まれ、宮次男(一九六七)、吉川良和(一九九一)録文の校訂および印刷ミスを正し、再校録した。

- (10) 『元史』卷62地理

- (11) 『上海藝術家』一九九〇年6期「元刊《救母經》發現的報導」。私見によれば奥書きの「弟子程季六名忠正」の「忠」が増筆字であるなど宋元字体の痕跡がここにも見え、たとえ「辛亥年」が加筆としても元代を遠く離れないと考える。

- (12) 京都知恩院所収應永33年(一二二六)「佛説阿弥陀經」禿氏由祥(一九二三)『古代版画集』所収

- (13) 南唐保大十年(九五二)泉州福建の僧による編纂。

- (14) 『廣韻』『集韻』箸、筴、：遲據切、『説文』飯敵也。或作筴。

- (15) 孟元老『東京夢華錄』中元節

- (16) 志村良治(一九八四) p 71

- (17) 白維國は「近代漢語表示動態的助詞「得」「的」でこの現象を「異化作用」と呼ぶ。胡竹安等編『近代漢語研究』p 235—242商務印書館(一九九二)所収

- (18) 『佛説孟蘭盆經』孫果森居士整理

『佛説父母重恩難報經』流通処、泉州開元寺。2冊ともシンガポールの新的印務公司発行の簡体字口語訳。裏表紙に「歡迎印送功德無量」とある。

第一圖



京都金光寺藏『佛說目連救母經』
 (新井慧譽教授惠贈写真)

第二圖



第三圖



第四圖



京都知恩院藏『佛說阿彌陀經』

附校録

凡例

一、段落分けについて

原文は巻物で上絵下文とも段落分けをしない。本稿中の原文引用の便を考え、校録にあたっては各場面を便宜上全34段に分けて録文した。各段の内容は第二章参照。

二、録文仕様及び凡例

a 各段とも以下の形式で校録を行う。

第○図 上絵の説明字句（説明句が複数有る場合は続けて列挙による登場人物および場面説明（筆者）：下線部は図中に示される説明句と登場人物名）

下文校録（上絵と下文が多少ずれる場合がある）

b 校録にあたって用いた記号は以下の通りである。

下線部 絵中に示されるインスクリプション説明句。

★は図間に引かれた境線位置を示す。

☆は湧雲・仏光・門壁・山崖などによる分断線の位置を示す。

三、字体

字体は原則として旧体字を用いた。原本が略字や俗体字の場合は（ ）内に正字を示した。異体字に関しては第三章参照。

録文は先行諸論文の字体や句読の誤りを改めた箇所が多いが、いちいち言及しない。

四、句読点

原文には全篇にわたり、日本重刊時と思われる漢文訓点と送り仮名

が打たれている。しかし誤りが多いため、本稿ではこれに替わり現代中国語の句読点（標点記号）を入れ読解の便とした。ただし文体途中の変更などのため不徹底な箇所を残す。例えば第三段、青提の直接会話体がいつのまにか描写文に変わったため、会話引用符号の前半（『）はあるが後半（』）を打てない等である。

佛説目連救母經

一図 王舍城（傳相長者、青提夫人、羅卜、侍女、駱駝、驢馬、豚）昔王舍城中有一長者、名曰傳相。其家大富、馳（駝）驢象馬、遍山盖野。錦綺羅紬、眞珠滿藏。諸頭放債、莫知其數。長者語常含笑、不逆人情。六度之中、常行六波羅蜜。長者忽然梁患、遂即身亡。夫婦二人、唯養一子、名曰羅卜。見父亡歿、葬於阿爺山所。

二圖 青提夫人与羅卜分財処

羅卜出往外国処（羅卜、下僕、馬）

三年服滿、來啓阿娘。『阿爺在日、錢財無數。即今庫藏、並欲空虛。兒欲將錢出往外国經紀。遣奴益利運將錢本出、有三千貫文。分作三分。一分留與阿娘、供給門戶。一分留與阿娘、供養三寶、爲爺日設五百僧齋。兒將一分、往全地國、興生經紀。』

三圖 棒打師僧（青提夫人、下僕に僧を追い出させ、家畜を繋ぎ、羊を屠る場面）

慈母見子行去、喚聚奴婢。『汝來。我今家中大富、若有三寶師僧、來我門前教化、爲我將棒打煞、莫留性命。將我兒設齋錢、廣買猪羊、

鵝鴨鷄犬、餵飼令肥、懸羊柱上。刺（刺）血臨盆。縛猪棒打、哀聲未絕。劈腹取心、祭祀鬼神、作諸快樂。

四回 后園假作設齋処（齋壇、二幡）

青提夫人開庫藏処（青提夫人）

開門引奴進処（金支）

羅卜遣奴報処（益利）

羅卜將一千貫錢本、去得三年。赴（趁）得三千貫錢利、廻歸本國。

離家四十餘里、在城西柳樹下歇。遣奴益利、先往歸家。啓白『我娘若作善事因緣、我將此錢歸供養娘。若作惡業因緣、我將錢爲娘捨施。』

益利歸到家中、金支遙見、走報阿婆『郎君歸矣。』婆問金支『汝那得知。』金支答言『門前見益利、知道郎君歸矣。』婆遣金支『汝且開門、莫與奴進。待我開庫藏、取幔幃帳設後園、假作設齋所在、開門引奴進語。』言益利曰『我從汝共郎君行去已後、我在家中、日設五百僧齋。汝若不信、向後園佛堂前、看我設齋所在。匙筋（箸）交橫香煙雜乱、碗（碗）株（碟）收拾、猶未得了。』

五回 東隣西舍迎接羅卜（隣舍六名）

羅卜外國回歸財宝（下僕、馬、財宝）

羅卜頂拝（跪く羅卜）

隣舍問言禮拜何者（隣舍二名。益利の報告）

益利走報郎君『婆也不是凡人。婆在家、每日設五百僧齋。』羅卜問言益利『汝那得知？』『歸到家時、正是匙筋（箸）交橫、香煙雜乱。僧徒並散、收拾猶未得了。』羅卜時聞此語、心生慙愧。『我且遙空頂禮阿嬢、一千餘拜。』時有東隣西舍、鄉閭眷屬、聞道羅卜歸家、出城迎

接。見郎君禮拜不起、問言『郎君、前頭無佛、後復無僧、禮拜何者？』

羅卜答言『慙愧阿嬢在家中供養三寶、日設五百僧齋。』鄉隣答言『汝母從郎君行去後、婆在家中、棒打三寶師僧、將汝設齋錢、廣買猪羊、鵝鴨鷄犬、餵飼令肥、懸羊柱上、刺（刺）血臨盆。縛猪棒打、熱湯焅身、哀聲未絕。劈腹取心、祭祀鬼神、作諸歡樂。』

六回 羅卜悶倒於地、青提夫人發誓（青提夫人、轎輿、轎夫二名、金支、下僕。上方に倒懸山崖。倒れた羅卜と見守る隣舍）

羅卜遂聞此語、舉身自僕。百毛孔中、盡皆流血。悶絕在地、良久不蘇。母見兒歸、出相迎接。唯見兒倒地不起、把兒手語兒曰、『汝聽我發誓言、江水蕩蕩、上有流波。成人者少、敗人者多。我從汝行去以後、日不爲汝設五百僧齋。令我還家、便得重病。不過七日、死入阿鼻大地獄。』羅卜聞母發願誓重、遂起歸到家中。

七回 青提夫人還家得重病処（青提夫人病室、羅卜、金支）

羅卜持籠担土墳靈（羅卜守靈、三鳥）

結草爲庵（羅卜坐禪、二鹿一鶴）

阿娘忽然重病、不過七日遂乃身亡。羅卜送阿娘山所、結草爲庵。守母墳靈三年苦行、白日提籠檐（擔）土、加母墳靈。夜間轉誦大乘經典、聲聲不絕、感得九色鹿子來現、白鶴呈祥。慈鳥眼中出血、百鳥啣（銜）土、來助墳靈。羅卜見鳥啣（銜）土、心生歡喜。覓（覓）得工匠、塑成佛像。供養三年、孝服將滿。即辭（辭）墳靈、而去至耆崛山中、見世尊。

八回 羅卜投佛出家拔髮（羅卜、双樹、阿難）

世尊摩頂受記改名（羅卜、釋家、僧八名、發光仏塔、蓮台）

羅卜白佛言『世尊、父母今已亡歿。孝服將終、心願隨佛出家。有何功德。』世尊喚言『善來羅卜。南閻浮提中、若捨一男一女、一奴一婢、隨佛出家。勝造八萬四千浮圖寶塔、現世父母福樂百年。七代先亡、當生淨土。何況自發菩提之心。』即遣阿難、剃除鬚髮。世尊摩頂受記、改名大目犍連。『我有十大弟子中、神通最爲第一。』目連白佛言『世尊、寶塔浩大、功德如何。』世尊答言目連『寶塔高大、簷簷（檐檐）相接。徹至梵天。百年之後、雨漏佛面、當來獲罪。出家功德、是金剛不壞之身。』

九凶 寶鉢羅庵（目連騰雲、二鳥。庵中羅卜、二庵、銜花二虎）

目連回來啓世尊處（目連、釋迦、菩薩二名）

天宮大門

目連白世尊『今欲辭（辭）世尊、入山學道。』世尊答言目連『汝若要修道、不用餘處、向我耆闍崛山中修道。』目連啓世尊『山中有何糧食？堪得學道？』佛言目連『山中唯有虎狼禽獸。每到齋時、口銜香花、自來供養。』目連聞是語已、擲鉢騰空、往到耆闍崛山中、至寶鉢羅菴（庵）中。左脚墜（壓）右脚、右脚墜（壓）左脚。以舌主（拄）上齶（腭）觀三十三天。至化樂天宮、唯見阿爺受天福、不見阿娘。迴來啓世尊『阿娘在生之日、道我日設五百僧齋。死合生化樂天宮、天宮不見、今在何處？』佛語目連『汝母在生之日、不信三寶、慳貪積惡。造罪如須彌山、死入地獄中。』目連遂聞此話、舉身自撲。悲啼號泣、從地而起、遊諸地獄。

十凶 剉確地獄（目連、五獄卒、罪人）

目連次復前行、見一剉確地獄。只見南閻浮提衆生、在剉確白中。斬

身千段、血肉狼藉。每日之中、萬死萬生。目連悲哀、問獄主『此獄衆生、前身作何罪業、今受此苦？』獄主答師『此是南閻浮提、剉斬一切衆生。男女盤旋、取頭共喫。口唱甘美、今落弟子手中、只得歡喜忍受。』

十一凶 釵（劍）樹地獄（目連、獄主、獄卒、罪鬼數人）

目連次復前行、見一釵（劍）樹地獄。南閻浮提衆生、在釵（劍）樹頭、手攀釵（劍）樹、百節零落。腳踏刀山、千肢俱解。目連悲哀。問獄主『此獄衆生、前身作何罪業、今受此苦？』獄主答師『此南閻浮提。不信因果、串鍊（鍊）衆生。男女盤旋、聚頭共喫。口唱甘美、今落弟子手中、只得歡喜忍受。』

十二凶 石磔地獄（倒懸山崖中の石磔地獄。目連、獄主、獄吏、獄卒、罪鬼）

目連次復前行、見一石磔地獄。兩魂大石、磔諸罪人、血流迸散。目連悲哀、問獄主『此獄衆生、前身作何罪業、今受此苦？』獄主答言『此是南閻浮提衆生。多煞虫蟻、教害無量。今落在弟子手中、只得歡喜忍受。』

十三凶 餓鬼地獄（目連、口中吐火の餓鬼、獄卒、獄主）

目連次復前行、見一隊餓鬼。頭如太（泰）山、腹如須彌、咽喉如針。行步之間、常作五百破車之聲。目連復問餓鬼『汝等前身作何罪業？』鬼復答師『我前身爲貪亡齋、不敬三寶。長劫不聞漿水之名、不見飲食之味、故獲斯報。』

十四凶 灰河地獄（目連、獄主、罪鬼）

目連次復前行、見一灰河地獄。一切南閻浮提衆生、在灰河中、奔波

迸走、遍身焦（焦）爛。見東門開、走向東門、東門復閉。見西門開、走向西門、西門復閉。見南門開、走向南門、南門復閉。見北門開、走向北門、北門復閉。如是波波馳走、更無休息。目蓮問獄主「此獄衆生、前身作何罪業？」獄主答言「此人前身爲火炮鷄子。今落弟子手中、只得歡喜忍受。」

十五回 鑊湯地獄（目連、獄主、罪鬼、倒懸山崖）目連次復前行、見一鑊湯地獄。只見南閻浮提衆生、在鑊湯中。波濤湧沸、煎煮（煮）罪人。目連悲哀、問獄主「此獄衆生、前身作何罪業、今受此苦？」獄主答師「此人南閻浮提衆生、不信三寶。生大富長者家中、煎煮（煮）衆生。今落弟子手中、只得歡喜忍受。」

十六回 火盆地獄（目連、獄主、獄卒、罪鬼、倒懸山崖）目連次復前行、見一火盆地獄。只見南閻浮提衆生、頭戴火盆、百節骨頭、炎炎火出。目連悲哀、問獄主「此衆生、前身作何罪業？」獄主答師「此是南閻浮提衆生、要喫衆生骨髓。今落弟子手中、只得歡喜忍受。」

十七回 目連從禪定起與獄主問答處（獄主、目連、地獄大門、倒懸山崖）

☆獄卒押送閻浮罪人至（之）處（衆牛頭黑雲を驅る）目連高聲、大叫（叫）阿娘。『娘在生之日、道我日設五百僧齋、香花飲食、非不如法。死合生化樂天宮。天宮不見、合在地獄、地獄不見。』獄中一萬四千牛頭獄卒、各相謂言「前門有生人聲、必是南閻浮提逆罪人來矣。我將鐵叉、望心押取將來。」目連正在地獄門前、頓悟坐禪。身發三昧。獄主叫（叫）換（數）聲、目連從禪定起。問「師

是何人、來我地獄門前？」目連答言「莫嘆貧道。貧道特來尋討阿娘。」獄主問「誰道阿娘在此？」答言「釋迦牟尼佛道、娘在此。」獄主問師「釋迦牟尼佛是師何眷屬？」目連答言「便是本師和尚。我是弟子、大目犍連。」

十八回 獄卒放下鐵叉、頂禮目連之處（跪拜獄卒二人）獄主入司、檢簿無名、出來報目連處（司錄王、目連、獄吏、獄卒）獄卒問是語已、伍（低）頭放却鐵叉、頂禮一千餘拜。讚言「善哉、善哉！今日果報、得見釋迦牟尼佛弟子面。」問「師娘何姓字？爲師往獄中檢簿尋看。」獄主入司、檢簿無名。出來報師「今往獄主檢簿無名。前頭又有大阿鼻地獄。」

十九回 目連在獄門前叫（叫）、無人應處（獄門上に四吐火銅狗、目連頭上から湧く如意雲、次回に侵入）目連次復前行、見一大地獄。牆高萬丈、黑壁萬重。鐵網交加、蓋覆其上。上面又有四大銅狗。口中常吐猛火、炎炎燒空。叫（叫）得千聲、殊無人應、迴來問獄主「前頭有大地獄、牆高萬丈、黑壁萬重、鍊（鐵）網交加。叫（叫）得千聲、無人出應。」獄主答師「師法力微小、要此門開、無過問佛。」

二十回 目連到佛所、賜袈裟錫杖（佛、侍僧、目連）目連聞是語已、擲鉢騰空、往到佛所。繞佛三匝、白佛言「世尊、目連見大地獄、牆高萬丈、黑壁萬重。叫（叫）得千聲、無人應矣。」佛語目連「汝執我十二環（環）錫杖、披我袈裟、掌我鉢盂。至地獄門前、振錫三聲、獄門自開、闔鎖（鎖）自落。獄中一切罪人、聞我錫杖之聲、皆得片時停息。」

二十一回 目連將錫杖振破地獄處（目連、獄門一名獄卒）

枷鎖（鎖）自落處（六名着衣解楔罪人倒懸山崖）

目連披得袈裟，手持錫杖，至地獄門前。振錫三聲，獄門自開，閤鎖（鎖）自落。目連突入獄中，獄卒推出。『師是何人，擅開此門？此門長劫不開。』目連問獄主：『此門不開，罪人從何而入？』獄主向師道：『南閻浮提多行不孝，多行三逆，不信三寶。命終之後，被業風吹之。倒懸而下，不從門來。』獄主復問：『阿師云何到此？』目連答言：『特來尋討阿娘。』獄主問師：『誰道師娘在此？』目連答言：『釋迦牟尼佛道娘在此。』『本師釋迦牟尼佛是師何眷屬？』目連答言：『便是本師和尚。』獄主問師：『娘何姓字？爲師往獄中檢簿尋看。』目連答獄主：『王舍城中傳相長者妻，青提夫人，姓劉第四。』

二十二回 獄卒報告，門前有出家兒，相尋青提夫人。答言有兒不出家處（枷鎖（鎖）青提、獄吏五、獄卒、罪人多數。倒懸山崖二處）

獄主入獄，遂喚『王舍城中青提夫人，姓劉第四。門前有出家兒。法名大目犍連，是佛弟子。大不可思議。若是汝兒，非久得離地獄。』獄主又問：『王舍城中，青提夫人，汝何不應？』罪人應曰：『恐獄主移向苦處，罪人不敢應言。罪人唯有一子，身不出家，不名大目犍連。』獄主出來報師：『有一青提夫人道，兒不出家，不名大目犍連。』目連答言：『獄主大慈大悲，信知道不識兒。父母在日，小名羅卜。爺娘死後，投佛出家，得佛改名大目犍連。』獄主問師：『今日尋得娘兒，將何報答弟子之恩？』目連答言：『今日得見阿娘，請諸菩薩轉大乘經典，報答獄主之恩。』

二十三回 青提夫人答言，羅卜却是我兒（鉢枷青提夫人、獄主、獄吏、

倒懸山崖）

獄主向罪人言：『吾助汝喜，門前覓（覓）者正是羅卜。』罪人應曰：『若是羅卜，即是懷抱寸腸（腸）之子。』

二十四回 目連得見娘處（地獄門口、二獄卒、首枷青提夫人、目連）此時獄主將鐵叉挑起，打釘落地。百毛孔中，盡皆流血。更著鐵枷刀劍，圍遶（繞）放出，與兒相見。問師：『還識娘否？』目連答言：『不識娘。』『前頭遍身猛火鎔鎔（熔熔），便是師娘。』目連知是阿娘，大叫（叫）：『阿娘！阿娘在生之日，道我日設五百僧齋。香花飲食，非不如法。死合生化樂天宮。天宮不見，却在地獄。兒日日每到齋時，有異種甘甜。先將來供養阿娘。阿娘形容何得大極劣瘦？』阿娘喚言：『我兒嬌子嬌子。長劫不見嬌兒。何得今朝恰在地獄門前與兒相見？娘在獄中受罪辛苦。飢吞鐵丸，渴飲銅汁。』

二十五回 飢吞鐵丸，渴飲銅汁（五受苦罪人。四獄卒。三處倒懸山崖）語猶未了，獄卒把定長釘釘身。煎煮（煮）腸肚。獄中罪人，各相謂言：『他家子母，向得相見。我等云何無有出期？』獄主答師：『不得與娘久停說話。汝阿娘受罪時至。師若不放阿娘，我快（暢）鑪鐵叉，望心插取將去。』

二十六回 目連見娘壓（壓）入獄中，將頭贖（贖）柱（柱）入（獄中）青提夫人、獄卒、目連背後湧雲，目連駕雲して仏処へ）

目連放却阿娘，被獄主驅（驅）入獄中。喚言：『我兒嬌子嬌子！苦痛難忍，百方作計，救取阿娘。』目連左脚在門閭內，右脚在門閭外。聞叫（叫）苦痛之聲，將頭贖（贖）柱（柱）。血肉（肉）狼藉。告獄主言：『欲入獄中，代娘受罪。』獄主答言：『師娘業力廣大，事不相干。欲

要出地獄、無過告佛。』

二十七回 目連擲鉢騰空、往詣佛所（獄門四面放光、二十八回の釋迦豪光と交錯）

目連聞是語已、擲鉢騰空、往詣佛所。遶（繞）佛三匝、白佛言。『世尊、目連娘在獄中受罪辛苦。如何救得阿娘、出離地獄？』世尊答言目連『我救汝母。』目連問言『世尊還救得否？』世尊答言『我若救汝母不得、長劫入地獄中、代娘受罪。』

二十八回 世尊放毫光、照破地獄處（釋迦、衆比丘比丘尼。釋迦の指より放光、散花）

鑊湯化為芙蓉池

鐵床化為蓮花座

剎（劍）樹化為白玉梯

牛頭獄主生天處（象牛頭馬腦、着衣罪鬼生天）

余（爾）時世尊領諸徒衆、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、無數億萬。前後圍遶、散虛空身、高七多羅樹。放眉間五色毫光、照破地獄。鐵床化作蓮華座、劍樹化為白玉梯、鑊湯化為芙蓉池。余（爾）時閻羅大王作如是語、讚曰『善哉！善哉！我親得礼拝燃香。還成不信、有佛勅牛頭獄卒、盡皆放生天。』

第二十九回 黑闇地獄（首枷目連母受飯）

目連將飯飼母

請諸菩薩轉經、其母得離黑闇

目連又問世尊『一切罪人盡得生天、阿娘托生何處？』佛答目連『汝母在生之日、罪根深重。業障未盡。出大地獄、却入小黑闇地獄。諸

菩薩僧齋餘剩飯、賜汝一鉢、往獄中飼母。』目連接得飯、往獄中。母見飯、貪心不改、左手接飯、右手遮人。飯來入口依（以）前、變成猛火。目連問世尊『如何得離黑闇獄中？』世尊答言『要娘離黑闇地獄、請諸菩薩轉大乘經典、方得離黑闇地獄。』目連即依佛勅、請諸菩薩轉大乘經典。娘得出黑闇地獄、又生餓鬼中。

第三十回 餓鬼衆（目連、吐火餓鬼四名、上方に倒懸山崖）

恒河

目連欲告世尊『娘出黑闇、托生何道？』世尊答言『離地獄中、托生餓鬼中。』目連問世尊『娘在獄中日久、欲共娘往恒河水邊、飲水洗腹。』世尊答言『諸佛飲水、猶如乳酪。衆僧飲水、猶如甘露。十善人飲水、能解飢渴。汝母飲水、變爲猛火。流入腹中、煎煮（煮）腹肚俱爛。』

第三十一回 點四十九燈、得娘離餓鬼（四十九燈、神幡、施餓鬼僧、功德人）

放生（一僧放鳥、一男恒河に放魚）

目連啓世尊『如何得娘離餓鬼？』世尊答言『請諸菩薩點四十九燈、放諸生命、造立神幡、得娘離餓鬼。』目連即依佛勅、請諸菩薩、放諸生命。造立神幡、點四十九燈、得娘離餓鬼身。

第三十二回 王舍城

目連母作狗身（狗、目連、長者？奴婢）

目連告佛『我母托生何道？』佛言目連『雖離餓鬼、托生合在王舍城中、化爲母狗。目連聞是語已、挺鉢往王舍城中、呼覓其狗。狗見目連、走出抱腰懊惱。『我是師母、師是我兒。』目連問母『今作狗身之苦、何如地獄之苦？』狗語目連『我乍可長劫作狗身、喫人不淨？我

怕聞地獄之聲。』目連又問世尊『娘作狗身辛苦、如何得娘離狗身？』

第三十三回 造孟蘭會処（釋迦、諸菩薩、青提、目連）

目連母於佛前受戒得生天処（青提騰雲昇天）

世尊答言目連『取七月半日、造取孟蘭盆齋、得娘離狗身。』目連問世尊『何故不取三十四、要取七月十五日？』世尊答言目連『七月十五日是衆僧解夏之日。歡喜俱會一處。用於（於？）汝母當生淨土。』目連即依佛勅、市買楊葉栢（栢）枝、造得孟蘭盆齋、得娘離狗身。目連娘於佛前受五百戒、願娘捨邪心、歸正道。

第三十四回 天母來迎（青堤、天女に導かれ天宮へ向う。天母）

☆造經処（三造經人）

施經功德得生天処（施經主頭上に騰雲、昇天。二受經人。）

感得天母、來迎接。得娘生忉利天宮、受諸快樂。當楊說法、度脫衆生。若有善男善女、爲父母印造此經、散施受持讀誦、令得三世父母、七代先亡、即得往生淨土、俱時解脫。衣食自然、長命富貴。佛說此經時、天龍八部、人非人等、皆大歡喜。信受奉行、作禮而退。

佛說目連救母經終

大元國浙東道慶元路鄞縣迎恩門外焦君廟界新塘保經居亦

奉三寶受持讀誦經典弟子程季六名忠正。辛亥年十月廿一日乙酉呈

甲辰年大德五月□日廣州買到經典普勸世人行年幾領傳之

大日本國貞和二年歲次丙戌七月十五日重刊小比丘法祖

助緣嶋田、理在、空念、周皎、理住、石塔、赤松、細河、佐々木

（花押）永祿元年三月吉日主持仙營祖室

（軸柱）印板在京五條坊門□□大藏房、造經之料、足合八十文也